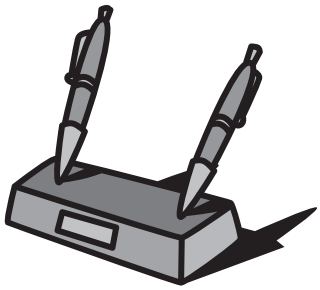
連載

IETF

Foreword

連載開始にあたって



田代秀一
産業技術総合研究所
tashiro@m.aist.go.jp

江崎　浩
東京大学助教授
hiroshi@wide.ad.jp

和田英一
富士通研究所
wada@u-tokyo.ac.jp

インターネットの歴史上最も画期的な発明は「新しい規格化プロセス」であった，といわれることがある．

この規格化プロセスの中で重要な役割を果たしている機関が，IETF（Internet Engineering Task Force）である．

その詳細については連載の本編をご参照いただくとして，情報の徹底的な公開，誰でも参加可能なオープンな議論，「ともかく動くこと」の重視，厳密な多数決によらない「ラフ・コンセンサス」による意思決定などにその特徴を見る．

このようなIETF的やり方には，たとえば「オープンな議論」は英語を母国語としない人にとっては不公平となる場合があるなど，批判の対象となり得る部分ももちろん含まれているし，「走りながら考える」というやり方が必ずしも適さない技術課題もある．

しかし，インターネットに関し，下はたとえば光ファイバの信号の仕様から，上はたとえばWWWの記述言語仕様まで，多様に存在する技術規格の中のほぼ中位に属する重要分野において，他の規格化団体と適切に役割分担をしつつ，IETFはその発展に多大な貢献をしてきた．その結果，これまでのインターネットの爆発的な普及をもたらす原動力となってきたことは紛れもない事実である．

IETFとインターネットとの関係を考える時，IETF単独ではなく，IETFを核として形成される，（1）技術標準コミュニティ，（2）オープンソースコミュニティ，（3）ベンダコミュニティ，（4）オペレータコミュニティの4つのコミュニティが相互に協力しながら，「ともかく動くもの」をスパイラル状に「進化」「発展」させてきたということを認識するべきであろう．このような意味で，我々が，IETFをいかに活用してゆくかを考えることは今非常に重要である．

IETF会議は年3回開催され，そのうち2回は米国内で，1回は他の国で行われるが，本年（2002年）7月14日～19日の第54回IETF会議は横浜で開催されることが決まった．

これは日本初の開催であるばかりでなく，アジア初の開催となる．おそらく，これまでになく多くの方々が日本から参加されることになるであろう．

そこで，この機会に，IETFへの関心を呼び起こすことを目的とし，本連載を企画することとなった．

連載では2つの視点でIETFを捕らえることとした．1つは会のあり方や運営についてである．これについては，連載第1回で，企業第一線の技術者の立場から，富士通の松平直樹氏に，「IETF活用法」についてご紹介いただくこととし，連載第2回で，IETF会議をホストする立場から，WIDEプロジェクト／慶應義塾大学の中村修氏に，会の運営や参加者サービス等についてご紹介いただくこととした．

もう1つの視点はIETFで議論されている重要事項の紹介である．これについては連載第3回以降，IETFに設けられた8つの技術分野の中から重要テーマを選び，順に紹介してゆく予定である．

この連載が，IETFへの理解を深めるとともに，積極的な参加を促す一助となれば幸いである．

（平成13年12月5日）